

## 1950年代のヒッチコック作品におけるマスキュリニティの危機

大塚藍美

アメリカの社会において、伝統的な「マスキュリニティ」(男らしさ)とは強さ、リーダーシップ、感情の欠如を意味している。多くの古典的ハリウッド映画は1910年代初期の物語映画の幕開けからこの男性像を順守してきた。しかし、第二次世界大戦によって男性たちは身体的にも精神的にも「傷」を負い、スクリーン上の支配的な男性像にも陰りが見られるようになった。1950年代が黄金期と呼ばれるアルフレッド・ヒッチコックは、伝統的な理想像との間に大きな溝が生まれた1940年代を経て、1950年代の男性像をどのように造形したのだろうか。本論文では、3つの作品を取り上げて分析する。

第1章では、『裏窓』における主人公(ジェイムズ・スチュアート)の否定的結婚観と不動性を論じる。車椅子に乗り身体的に自由の効かない彼は受動的な存在であり、ヒロインを助けることができない姿が描かれる。

第2章では、『めまい』の主人公(ジェイムズ・スチュアート)の抱えるトラウマや恋人への病質的執着といった精神的脆弱性の描写と、「男らしさ」を象徴する支配性を回復する途端に罰せられるというストーリー展開に着目する。

第3章では、『北北西に進路を取れ』の主人公(ケーリー・グラント)が持つ社会的無責任さが物語の最後まで解決されないことに注目し、一見勇ましい主人公の「男らしさ」が傷つけられていることを指摘する。

グラントもスチュアートも、1950年代以前の作品では最終的に「男らしさ」を回復する主人公を演じている。しかし、1950年代の多くの作品で彼らの演じる主人公の「男らしさ」は物語の中で弱体化する一方である。しかし、本論文で具体的な場面を取り上げ明らかにしたように、ヒッチコックはこの「新しい」男性像を否定的に捉えるのではなく、むしろ肯定的に描き出している。この姿勢こそが1950年代の彼の映画の持つ特異性と言える。